

## 『日野の雪』

Yamaguchi Tomoko

頭に櫛の歯が下って、少女はぎゅっと目を閉じた。くすぐったくて、すくめた肩の間から思わず笑った。鏡台の大きな鏡に、小さな彼女の笑顔と、それにつられて微笑むお姉さんの顔がいっしょに映った。隣の家に遊びに来た彼女は、お姉さんに髪を結ってもらっていたのだった。目を閉じてじっとしていると、お姉さんの手つきが、いつも髪を結ってくれる母の手よりも、やさしく感じられた。

お姉さんは彼女の髪を梳きながら、時たま窓を見た。居間の東側にある、両開きの大きな窓だった。その窓から、近所の家々の屋根越しに日野山（ひのさん）が見えた。突き抜けるような青空の下だった。

三月の月立ちにもなれば、冬の間而降った雪は大方消えてしまう。町中にも雪らしい雪は見当たらなくなった。ただ、日野山だけが、まだ頭から雪をかぶったまま冬の面影を残していた。雪の溶けた山裾は、深い紫の色に染まっていた。

「日野山の雪ももうしばらく溶けそうにないね」

お姉さんはふっと手を止めて、

「なっちゃんは何歳になったの？」

「わたし？ 十歳」

「十歳かあ。もうそろそろ初恋の時期かな」

彼女は驚いて勢いよく頭を振り回した。とたんに、櫛を入れた髪も弾かれたように肩口に舞い上がった。

「まだなっちゃんには早いかな」

お姉さんがくすくすと笑うと、彼女は自分の顔が火のように熱くなるのを感じて、恥じらいにうつむいた。

「私はね、なっちゃんくらいのときにはじめて好きな人ができたんだよ」

お姉さんは窓いっぱい広がる日野山を見た。

「日野山の麓に育った子の恋はね、きっと息が長いて、私はそう信じてるんだ。どの山よりもずっと長い間雪を残しているものね。その雪を見ながら育った私たちは、きっと息の長い恋をするのよ」

四方八方どこを見渡しても、山並みの途絶える方角のない町だった。高低（たかひく）のゆるやかなうねりを延ばしながら、小さな山々が重なり重なって円を描き、町を囲んでいる。そのいくつもの山の中で、一番高く優雅にそびえるのが、越前富士——日野山だった。どの山よりも一番早くに雪を頂き、どの山よりも一番長くその雪を残し、季節によって変わる色彩で、冬の訪れと春のはじまりとを壮麗に告げた。小学校の校歌にも中学校の校歌にも歌われ、町の人々は幼いころからこの山に馴染むのだった。

「私の初恋の人はね、とっても楽しい人で、いつもクラスを中心にいたんだ。やんちゃ坊主で驚くほど声が大きくて、少しもじっとしてられないの。本当ににぎやかな子だったわ」

彼女ははっとして鏡の中のお姉さんを見た。白い花のように微笑むお姉さんは、東の窓から差し込む光に包まれて、遠い幻影の世界にいる人のようだった。彼女は思わず小さな手を鏡に伸ばしそうになったが、幸せそうなお姉さんの微笑みがかはかなく壊れてゆきそうで、指先一つ動かなかった。微笑みから紡がれるお姉さんの声が遥かに遠ざかってゆき、彼女は目の前に、今年の冬の雪原を思い出したのだった。

校庭に、生徒たちの作るたくさんのかまくらが白くふくらんでいた。毎年雪が降ると、学校ではかまくら大会をやるのだった。クラスの中で八人ほどの班に分かれ、生徒たちは滴るような元気で見渡す限りの雪原に飛び出してゆく。

はにかみ屋で人見知りをする彼女は、スコップを持って、なかなか自分の班の仲間に入れず、じっと立ち尽くしたまま、今にも泣きそうにしていた。

「なっちゃん、なっちゃん」

と、底抜けに陽気な声が矢のように背中に飛んできたのは、彼女が遠くから、自分の班の仲間たちの楽しそうな姿を見ていたときだった。

まったく不意に背中に当たった声に驚いて、思わず振り返ろうとすると、振り返りもしないうちから誰かに右手を取られて、彼女は引きずられるようにして雪原に飛び出した。

「なにやってるんだよ。早く行こうぜ」

そう言って、彼女の手を取りながら太陽の光のように笑っているのは、クラスで一番のわんぱく坊主であった。彼女は胸をつかれて、息が止まった。そして、自分の心臓からあたたかい血が体全部に流れてゆくを感じた。冬に包まれた雪原の中で、自分たちの周りの空気だけがぬくもりを持ったような気がした。

彼はほんのり色の黒い顔を彼女に向けて、

「でっかいかまくら作るんだからさ、なっちゃんも手伝ってよ。なっちゃんがいなきゃ、でっかいのなんて作れないんだからさ」

彼は彼女と同じかまくらを作る仲間だった。普段から彼女が一人ぼっちでいると、こうして彼女を驚かすようなことをして、いたずらににっと笑って見せるが、そんなとき、彼女ははにかむばかりで、声など一つも出さず余裕がないのだった。彼女はただうなずいて、幼い頬を赤く染めた。

「なっちゃん、いっしょにあそこまで雪取りに行こうぜ。日野山に負けないようなの作るんだ」

彼は走りながら、風の中で言った。

「——日野山？」

思わず口から出た疑問の言葉に、彼女のはにかみは一時消えた。黒い瞳ではっきりと彼

の横顔を見据えた。

「そんなに大きなのを作るの？」

あまりに純朴な彼女の言葉に、彼は大きな声を出して笑った。

「違うよ。あんなに大きなの作ってたらそのうちじいさんになっちゃうよ。日野山って、春になっても雪が残ってるだろ。あの雪よりもずっと長く残るかまくら作ってみたいんだ」

彼は彼女を振り向いて、

「なあ、作れるかなあ」

彼女はひとときぼかんとしていたが、急に自分の誤解がおかしくなってきたのと、彼の彼らしい野望とに愉快さがこみ上げてきて、彼と同じようににっと笑った。

「うん。きっと作れるよ。がんばろ」

彼も満足そうに歯をむき出して笑った。

「なっちゃん、もっと早く走ろう。おれ、早く雪を集めたいんだ」

わんぱくの彼は、大人しい彼女には信じられないほどの速さで走った。彼女は到底ついてゆけず、雪に足を取られながら、必至に彼の腕につかまった。彼はまだ、彼女の右手を離さない。

「待って。待って。速い。転ぶよ」

彼はやんちゃ坊主らしくにっと笑ったまま、いっそう足に力を入れて走った。

「待ってよお」

二人はがむしゃらに走った。体をいっぱい動かしているうちに、呼吸も忘れてゆくほど楽しくなって、二人はいつしか声を上げて笑っていた。

たくさん雪のある校庭脇まで来てようやく足を止めると、彼は息を整える間もなく、

「作れるかなあ……」

笑いの残った声でつぶやいた。

「きっと作れるよ」

彼女も膝に手を当てて深く息を吐きながら言った。

この町の一番東にたたずむ悠久の日野の山が、魂の弾けるような子供たちの輝きを映し出していた。広い校庭には、小さな子供たちの笑い声がいっぱいに満ちていた。

「はい、できた」

お姉さんのやわらかい手のひらに肩をたたかれて、彼女ははっと気がついた。雪原を見ていた瞳が突然鏡の中に引き戻されると、そこには、いつの間にか髪を二つに結わえた自分の姿があった。お姉さんは彼女の髪を結っている最中でも話をしていたはずであったが、彼女は、お姉さんの話も、お姉さんの手が自分の髪を結ってくれたことも、なにも覚えていなかった。

「なっちゃん、おつかれさま。かわいくできたね」

お姉さんは幸せそうに微笑んで、鏡越しに彼女と目を合わせた。彼女はぼんやりしたままうなずいた。

「なっちゃん、なにか食べようか。クッキーがあるはずだから持って来るね」

お姉さんはゆっくりと慎重に立ち上がって、台所に行った。

お姉さんが行ってしまうと、しんとした部屋の中で、彼女は窓越しの日野山を見つめた。鮮やかすぎる残雪の輝きが、彼女の瞳を澄みやかに潤すようだった。

お姉さんはすぐに戻ってきた。炬燵の上でクッキーの包みを開けていると、玄関のほうに物音がして、「ただいまあ」と、男の人の声がした。驚くほど大きな声だった。

「あ、帰ってきた」

お姉さんは彼女に笑いかけて、「この子のお父さんなのよ」おなかを撫でて立ち上がり、玄関にその人を出迎えに行った。

彼女ははっとしてお姉さんの後ろ姿を見詰めた。

お姉さんのおなかはもうずいぶんと前から大きくなっているのだった。

(了)